
りんご飴

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りんご飴

【著者名】

乙2430

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

平成22年元旦。東京は向島に住む『私』は、年が変わつてすぐに川向こうの浅草寺へと赴く。初詣ではない。ただ群衆の気配に中[あた](#)りにいくのだ。

深夜思い立つて家を出た。向島の路地は両側から暗闇が覆い被さるような狭さである。水戸街道へ出てほつと息をつく。新年を迎えた冬の空気は、昼間の喧噪をアスファルトの上にそつと沈殿させていた。何年ぶりかに開いた土蔵のような静けさだ。固い地面に靴底が触れるたび、小さな足音が静謐を乱した。

道沿いの信号が一斉に変わる。と、途端に光の一団が立ち現れて、片側二車線の国道に溢れかえった。深夜1時。こんな日のこんな時間でさえも、決して眠らぬ東京の道路。生きる人間の浅ましさである。

言問橋東の交差点を隅田川に向かつて折れる。角の派出所で警官が何か言い合いをしている。ステンレスの外板を輝かせた巨大なトレーラーが一台、どうどろとエンジンを轟かせて道を曲がつていった。

堤防の手前、隅田公園の林は暗がりに沈んでいた。隅田川を渡る橋の上に出ると、赤いテールランプがいくつも自分を追い越していく。風のない夜の川面は黒く平らかで、対岸の街灯の列を、ほぼそのままの姿で水面に映し込んでいた。橋上にはぽつりぽつりと人影が動いていた。初詣に行くのだろう。

橋の西詰めで人の列を離れる。自分は雷門へ向かうわけではないのだ。新年めでたしと神仏を訪なうのは、ひねくれた自分の趣味ではない。今夜はそう、喧噪を呼吸しに行くのである。ただ人波を泳いでハレの空気を肺に吸い込む。それだけでいい。

浅草寺病院の手前で横道にはいると、暗がりの向こうに明かりが開けた。露店を照らす白熱灯の光に、参拝を終えた群衆の姿が膨らんだように浮かび上がっている。近づくと明かりの手前、暗い路地の両脇に座り込む無数の人影に気がついた。祭りの毒にあてられたものか。しかしどうでもよい。

群衆の中に泳ぎ入る。そこは順路の末端で、賽銭を投げ終わつた客を遊ばせる、蛸足のように伸びた露店街の一角であつた。売つてゐる売つてゐる。焼きそばにビール、チョコバナナにクレープ。屋台の上に砂を盛つて串を立て、鮎の塩焼きを作つてゐる青年がいる。子供の頭ほどもあるサザエの壺焼き四千五百円也。羽子板、舞玉、招き猫。なぜここでこんなものをという不思議な店もある。宝飾品。おもちゃ。等々。

入つてすぐの店で甘酒を求める。二百円で喉を温め、奥へ向かつて歩き出した。やがて本堂の脇あたり、今しがた参拝を終えたばかりの群衆を吐き出す出口が見えてくる。普段はない位置に鉄板の壁が設えてあつて、そこに穿つた穴から続々と人間が出てくるのだ。なにかこんな話を思い出す。ある人が言つた。人間とは結局、女の穴より出でて土の穴へと消えてゆくものだと。それを聞いて別の人があ言つ。いいや違う。人間は産科から出でて焼き場へと消えていくものであると。この鉄の壁は仏のものか人のものか。

おみくじの列は端がわからぬほど長かつた。破魔矢は隣の三社のほうか、結局売り場を見かけなかつた。群衆の大半は若者である。結構な数の外国人もいる。一周して満足し、帰りしなにふと見かけた達磨売りに声を掛ける。赤い玉に筆で彩色して、胡桃大のものから一抱えもあるものまで白布の上に並べていた。

一番小さいのは五百円だよ、達磨売りが言つ。次に大きいのが八百円、その上が千五百円、さらに大きいのが一千円だそうだ。その上にも三種くらいあつたが、もとより自分のような男には売れやしないと踏んでいるのか、そこまでしか説明がなかつた。これは木でできているのかと尋ねると、ひと玉手に取らせてくれた。軽い。なるほど成形した樹脂などではなさそうだ。新年の飾りにと一番目に小さいのを買い、ポートのポケットに滑り込ませた。賽銭は投げないのにこんなものを買うというのは、いかにも舐めた不信心だ。

人混みを抜けて露店の端までやつてくると、りんご飴の暖簾が目に入った。大と小、二種類の赤玉に箸を刺して、砂糖をからめた頭

の重い飴だ。ふと、ひとつ買ってみようと思った。実はこれ、私に
とつて、見たことはあっても食べたことのないものの一つだった。
あの赤玉は本当に林檎なのか。縁日の売り物には、子供時代に置き
忘れた謎がいくつもあった。

大玉三百円。飴にはセロファンの袋が被せられ、これまた懐かし
い緑色のモールで首のところを縛つてあった。思ったよりも重い。
子細に調べるのはあとのこととし、そのまま暗闇を抜けて裏手の言
問通りへと出る。ふと息をついた。白い。

帰り道、隅田川を渡りながら手に持った大きな飴を思う。人が見
たらなんと思うか。まさか私が食べるとは思つまい。子供への土産
か。ありそなことだ。

想像が膨らむ。ある男がいる。男には妻子があるが、家庭を顧み
ず、晦日の夜にも浅草界隈で遊び呆けている。男は除夜の鐘を聞く
と巣窟の娘に頼み込み、初詣に連れ出すことに成功する。だが群衆
で娘とはぐれる。携帯の普及した今ではありえない話だが。

見上げれば奇しくも満月。そつ、今夜は満月だ。男はふと我に返
り、脇の露店でりんご飴を買つ。それを手に帰路につく。正月の朝
くらい家族と過ごしてもよさそなものだ。しかし隅田川を渡る橋
の上で、男は衝動的に黒い水へと飴を投げ捨てる……。

こんな話を書く奴は、クズだ。

墨堤通りの首都高の下で、オレンジの街灯に飴をかざしてみた。
真つ赤な玉はてらてらと光つて、飴の下の実質を巧みに覆い隠して
いた。手の中で飴を回してみた。と、丸い表面の一ヶ所に、小豆く
らいの泡があるのに気がついた。丸く膨れて固まつた、小さく透明
な半球だ。しげしげとそこを眺める。

それは虫食いの跡に空気が入つて、熱い飴を内側から膨らませた
痕跡だつた。りんご飴の中身は、本当に林檎だつたのである。

(後書き)

今年もよろしくお願いいいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2430j/>

りんご飴

2010年10月8日14時40分発行